

こずかた

No.154

令和6年3月1日発行
盛岡市教育研究所
☎019-651-4111 (内7371)
印刷/セーコー印刷 651-3606

人間形成機能のさらなる充実を

盛岡市教育委員会 教育委員 玉川 英 喜



「授業がもつ人間形成機能を大切に」。石川悌司先生のある講話での言葉である。

言うまでもなく、日本の教育は人格の完成を目指して行われる。幼児期には人格形成の基礎、義務教育段階では自立的に生きる基礎、そして、高校で専門性を磨き、大学で高い教養とより高度な専門性を培う。知識・技能の習得にとどまらず、心を耕し、自尊の心、惻隱の情、延びては「人間尊重の心」を育む。数年前、野村総研とオックスフォード大学の協同研究「将来人工知能(AI)やロボット等

による代替可能性な職業」が話題となった。代替可能性の低い職業100種の中に、教師があげられている。当然といえば当然である。AIの進展はめざましく、知識等の習得、理解・思考の深まり等において、AIやICTの活用による効果は著しいものがある。これからの時代には欠かせないツールであることは言うまでもない。

一方、授業はその学びの過程において、子どもの心を育む。教師の話し方、子どもとの遣り取り、板書の仕方、資料提示の仕方等々の中に、子どもは人としての有り様を学ぶ。やさしさ、きびしさ、あたたかさ、しなやかさ等々が毎時間毎時間子ども心に刻まれる。子どもは教師の姿に「心」を学び、人格を形づくっていく。AIにはできないことである。

司馬遼太郎は「二十一世紀に

生きる君たちへ」という短編で人間として欠かすことのできない心構えを説いた。「助け合い、いたわり、他人の痛みを感じる、こと、やさしさ、それらは本能ではなく、訓練によって身につけるもの。例えば、友達がいる中、『ああ痛かったろうな』と感じる気持ちをそのつど自分の中でつくりあげていく。そうして自己を確立することで魅力ある人格を備えた、たのもしい君たち」になっていく」と。

二十一世紀、

災害、コロナ、未曾有の危機が頻発する。「いじめ」は大きな教育課題として学校教育に影響を落とす。これを乗り越える力、魅力あるたのもしい人格の形成にある。これをなし得るのは教育しかな



科学・歴史文化体験学習

こずかた写真館 ③

2月1日、本年度第5回目の「いきいきスクール」が開催されました。(写真：遺跡の学び館)

い。教師がなし得る教育にしか。さまざまな機会に魅力ある子どもたちの姿、熱い思いで子どもたちと向き合う教師の姿をたくさん見てきた。先達・先人の言葉は時を超えてあるべき理(みち)の根本を語りかけてくる。魅力ある子どもや教師の姿と重なって。

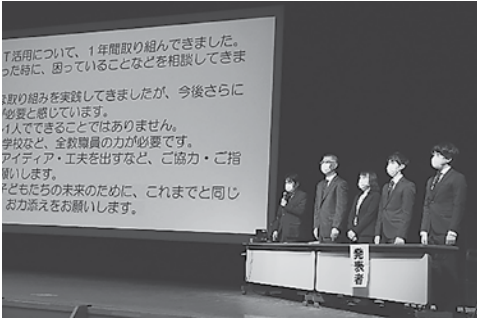
令和5年度盛岡市教育研究所

第58回研究発表大会

令和6年1月5日、都南公民館・キャラホール及び市民総合運動公園総合体育館を会場に、第58回目の研究発表大会が開催され、市内外から約320名の先生方に参加いただきました。ここでは、全体研究発表及び分科会発表の様子について、参加者の感想等を交えながら紹介します。

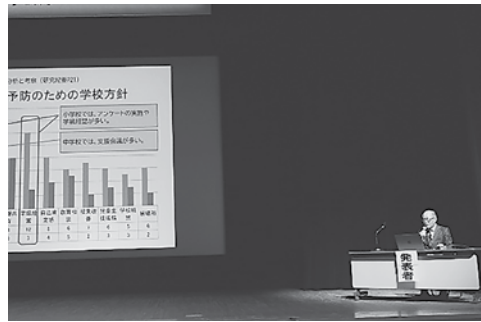
全体研究発表

今年度の全体研究発表では、昨年度に引き続き、盛岡市の喫緊の課題である「児童生徒の不登校対策に関する研究」、「小中学校におけるICT活用に関する研究」の2本を発表しました。



ICT 活用に関する研究

ICT 活用の発表では、市内教員への質問紙調査の結果から、ICT を積極的に活用しようとする環境づくりの必要性が示されるとともに、授業や校内研究会での活用事例、ペーパーレスの取組など、様々なアイデアが発表されました。なお、不登校対策の発表は



不登校対策に関する研究

4ページに概要をまとめました。また、関連する学校の取組を4〜5ページに掲載していますので、ぜひお読み下さい。
〔発表後の感想から〕
・ ICT の教科での活用は、教科の本質を的確に捉えて使う必要があることを改めて感じた。一方、業務時間やコスト削減のためには積極的活用を図る余地があり、同僚や保護者と認識を共通なものにして活用を進めていくためのリーダー的立場の役割が大きいと実感した。
・ コロナで欠席することに抵抗がなくなり、保護者の方が進んで休ませている場合も増えた。また、阿部先生のお話の中にもあったように、学校への不快感や登校させることへの不要感をもっている保護者も少なからずいると思われる。なかなか打開策がなく苦労している先生方が本校にも複数いらつしやる。子どもがどんな形であれ学んでいけるように、連携していきたい。
・ 不登校問題については、全くその通りと納得できるところが多々ありました。不登校児童に対応する人的問題が、今後も大きな課題だと感じました。ICTについては、やはり教師自身が使えるように

なることが大切なので、そのためにも、使っていく必要性を実感しました。

分科会発表

〔学力向上(外国語)分科会〕

外国語による「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の言語活動を通じた授業づくりや授業改善実践例についての研究発表や、参会者との協議を通して、英語授業の一層の質の向上について共通認識した大変充実した分科会となりました。



学力向上(外国語)分科会

〔分科会後の感想から〕

・ 教師側が明確なビジョンをもって、生徒が主体的に学習できるシステム作りを考えていきたい、と思うような、今後のあり方について考えさせ



学力向上(算数・数学)分科会

られるお話でした。研究の内容については、各領域ごとに、具体的な実践を発表していただき、大変参考になりました。特に情報機器を用いたオーセンティックマテリアルでの英語学習に興味をもちました。また、リテリングは本文の後に、やらせつばなしにしているのが現状なので、sense から取り入れることを実践してみようと思います。
〔学力向上(算数・数学)分科会〕
児童生徒の数学的な見方・考え方を豊かにすることを目指した授業実践を行い、その成果と課題を踏まえた発表を行いました。小中学校の教員が互いの授業づくりを理解する有意義な時間となりました。

〈分科会後の感想から〉

・各種調査結果をもとにした授業改善の提案、ありがとうございました。自分は中学校ですが、小学校の事例発表のおかげで図形指導の着眼点について、見直すことができました。教材研究、生徒理解を深めていきたいと思えます。中学校発表については、この3学期、早速実践をまねてみます。

・根拠を問うこと、予想する活動、ゆさぶる発問等、一人一人がしっかりと考えをもち、根拠を説明する力を子どもたちにつけていきたいと思えました。

【体力向上分科会】

教育活動全般における走力向上の取組を紹介されました。この発表を各校が創意工夫して活用することで、盛岡市の児童生徒の走力向上が期待されます。複数の運動要素を取り入れた工夫あるウォーミングアップ等の研修も行い、楽しく学び、充実した時間となりました。

〈分科会後の感想から〉

・体力向上に関する運動やゲームなどを体験しながらの発表だったので、分かりやすかった。子どもたちに楽しませながら体力作りができそう

だと感じたため、自分の学校に帰ってから実践してみたいと思った。

・貴重な経験をありがとうございました。教員2年目であり体育の指導に自信がなかったのでも勉強になりました。私たち教員自身も楽しめる発表でした。

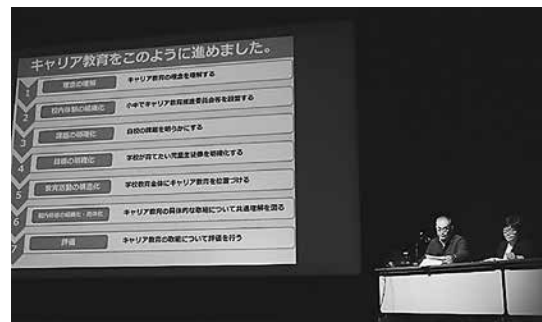


体力向上分科会

【キャリア教育先人教育分科会】

キャリア教育について、令和4年度から委託研究を進めてきました米内中学校区（米内中・米内小）が発表しました。また、「先人教育」について、見前中学校区（見前中・見前小・津志田小）、渋民中学校区（渋民中・渋民小・生出小）の2つの中学校区が実践を発表しました。それぞれ、学ぶ意欲・目的を培う教育活動と位置付けられており、小中一貫教育の視点を大切にしたい各中学校区の取組は、参加

者にとつて、学びの多い発表となりました。



キャリア教育・先人教育分科会

〈分科会後の感想から〉

・キャリア教育では、小中それぞれ目標をアンケートに基づいて系統化して実践されたことに感心した。単に職業体験や訓練によらず、児童生徒の思いに寄り添った取組であることを大切にしたい。先人教育については、盛岡の五大先人の枠によらず、地域に根付いた先人に広げる事で、地元愛や地域の誇りが培われると感じた。どちらもコロナ禍を跳ね除け、よく取り組まれたものと思います。

・キャリア教育、先人教育ともに中学校区での9年を見通した目標の明確化や指導計

画、内容の精選が重要だと思いましたが、課題で触れられていたが、人材の高齢化、減少はどの学校においてもその通りであると思えました。必要な資料は記念館や図書館等を活用するのみならず、ネット活用でデータベース化などしていくことも出てくるかと思いました。

【研究指定校中間発表】

来年度に学校公開研究会を控えた下橋中学校、高松小学校、乙部中学校区（乙部中・手代森小・都南東小）（いずれも令和4年度～6年度指定）の3校に、研究推進の状況について発表いただき、これまで2年間の成果と今後の取組の方向性について、確認がなされました。

〈中間発表後の感想から〉

・各校のすばらしい実践によ



研究指定校中間発表

り子ども達が成長しているように思いました。どの研究も、めざす子ども像が明確になっており大変勉強になりました。

・校内研究の在り方について考えさせられた。研究だからと旬な言葉を使ったり、手立てと目的が混ざってしまうと「研究のための研究」になりがちである。「生徒の幸せや、なんとかしたい課題があつて、そのために手立てを講じる」が実践研究の原点だと思ふ。紀要や発表原稿をつくるのが目的にならないように気をつけたものだと感じた。

今回の発表大会では、質疑の時間が十分ではなかった分科会もありました。来年度の発表大会に向けて、時間配分を含め、運営方法等について検討していきます。

盛岡市教育研究所では、研究成果の普及を目的として、研究紀要を作成しております。PDFデータを各学校へ送付するとともに、研究所のホームページに掲載いたします。

各学校における今後の研究推進に、ぜひ御活用ください。

児童生徒の不登校対策に関する研究

教育研究所では、昨年度に引き続き、盛岡市の教育課題である児童生徒の不登校に関する研究を行いました。研究内容については、1月の研究発表会大会でも説明しましたが、ここでは、その概要を紹介いたします。研究の詳細については、市のホームページに掲載している研究紀要をご覧ください。

I 研究の背景

国・岩手県・盛岡市の調査によると、令和4年度の小・中学校の不登校児童生徒数は、前年度を大きく上回っており、不登校対策は喫緊の課題になっています。盛岡市の不登校児童生徒数は491人で、前年度よりも70人増え、10年前に比べると2・7倍の増加となります。児童生徒100人当たりの発生率は、小学校が岩手県よりも多く、小学生の不登校が盛岡市の課題であるといえます。

II 児童生徒の居場所づくり

本研究では、不登校児童生徒の居場所についての調査を

行い、その傾向と特徴を考察しました。

1 学校内の居場所

不登校等の児童生徒が教室以外で過ごす場所は、小学校は「保健室」が多く、中学校は「特設教室」が多くなっています。小学生は、登校しないので「家庭」で過ごす児童が多いのが特徴です。中学校の特設教室は、不登校対策相談員やスクールアシスタントが常駐し、日常的に生徒の学習支援や教育相談を行っています。特設教室で過ごすよさとして、「自分のペースで落ち着いて学習ができる」「担当者との関係で気持ちが安定する」が挙げられています。

2 学校外の居場所

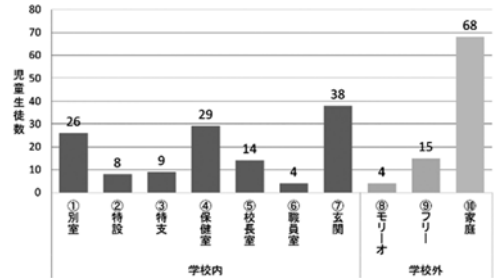
(1) ひろばモリーオ

モリーオは、自学自習を原則としているため、令和4年度の青山・仙北教室の利用者は、ほとんどが中学生です。しかし、近年、小学生の不登校が増えてきていることから、できる限り小学生の受け入れを増やすようにしています。モリーオと学校がよりよく連携するためには、市内の

【調査Ⅰ】の結果及び分析と考察（研究紀要P8）

不登校等の児童生徒の居場所

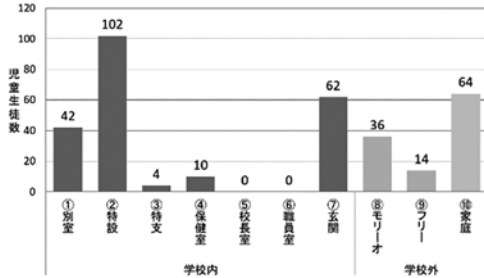
小学校(37/41校)



【調査Ⅰ】の結果及び分析と考察（研究紀要P8）

不登校等の児童生徒の居場所

中学校(22/23校)



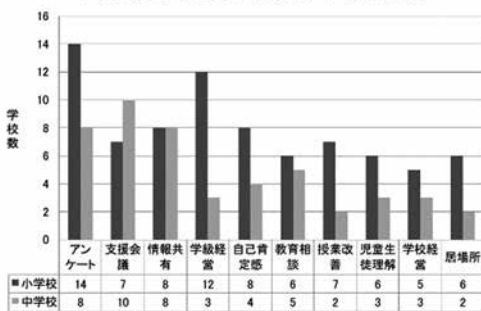
(2) フリースクール

令和4年度の利用は、中学生よりも小学生が多くなっています。中

III 学校の不登校対策

市内の小・中学校では、学校の教育方針に不登校予防の対策を位置づけて、どの子ども安心して学べる学校づくりを目指しています。しかし、不登校対応には様々な難しさがあり、各学校が対応に苦慮しているのも事実です。

不登校予防のための学校方針



IV まとめ

以上を踏まえ、不登校対策について提言をまとめました。

- 1 校内教育支援センターの整備と運用
 - 2 ひろばモリーオのセンター機能の拡充
 - 3 フリースクールや関係機関との連携推進
- 本調査を通じて、不登校は学校だけでなく、教育委員会や関係機関が一体となって取り組むべき課題であることを再確認しました。

各校の教室以外の学びの場の紹介

校内教育支援センター(相談室と学習室)の運営
北陵中学校

本校の学校課題の一つとして、不登校や学校不適応生徒への対応が挙げられる。毎年、長期欠席生徒として50名に迫る数を報告している。その中で校内教育支援センターを利用して生じる生徒は3学年で約15名である。不登校や学校不適応生徒が教室復帰を目指す段階として相談室を活用している。相

談室には不登校対策相談員及びスクールアシスタントが常駐し、利用生徒のサポートに当たっている。相談員と副校長、教育相談室長による定例の打合せを行い、利用生徒の現状把握とともに、学年や学級との緊密な連携を促進し、より効果的な支援を目指している。また、相談員は相談室での生徒の様子を日々記録し、関係職員で共有することで生徒の状況把握を徹底し、より良い支援につなげていく。

1 生活支援

相談室を利用する際のルールを確認し、可能な限り学校の日程に沿った生活を送ること、教室復帰を目指している。生活リズムの確立が利用生徒の活力ある日常生活につながっている。また、相談員の指導のもと、運動やレクリエーション活動を取り入れることで、コミュニケーション能力や人間関係の調整能力が向上し、これが相談室への意欲的な登校や教室復帰、卒業後の安定した生活に繋がっている。

2 学習支援

相談室とは別に、3年生のために学習室を設置している。落ち着いた雰囲気の中で、

進路実現に向けた学習に励むよう促している。個々の状況や意欲に応じて、学習指導や補習を学校生活サポート推進員、学年や担任を中心に行っている。また、学習に取り組む際の教材として、学習プリントやICTの活用を積極的に行っている。

3 心理的支援

週に1回、スクールカウンセラーが来校し、相談室に顔を出している。雑談しながら気軽に相談できる環境を提供し、実際にカウンセリングも行ってはいる。また、相談室のスタッフと生徒への接し方について共有している。これらの取組により、多角的な支援が可能となっている。

相談室への登校により、教室復帰を果たした生徒や一部の授業への参加ができるようになった生徒も多い。また、「相談室だったら」と登校するきっかけとする生徒も存在している。

他の支援として、支援会議における支援方針の決定と実践、SSWの積極的な活用が挙げられるが、校内教育支援センターは、不登校・学校不適応生徒への多岐にわたる支援の中で重要な役割を果たしている。今後も生徒のニーズ



相談室の様子

に応じた支援を継続していきたい。

ICTを活用した個に応じた学習環境づくり

下橋中学校

本校では何らかの理由で、教室において授業を受けることができない生徒のために、ICT機器を活用し、授業の様子を配信しております。利用している生徒には、

- ① 学校に登校することに抵抗感がある生徒
- ② 集団不適応などにより教室に入りづらい生徒
- ③ 感染症対策のため教室に居られない生徒

等があり、本校ではできるだけ個に応じた学習環境づくりに取り組んでいます。また、ICTを活用したオ



教室から授業を配信



教室以外で受信して学習

ンライン授業は、学校に登校できない生徒と学校とのつながりを保つための有効な手段の一つにもなっています。オンライン授業を利用することで、学校の授業に参加しているような感覚となり、自宅に居ながらも授業における学習の様子や雰囲気を感じながら、学習に取り組むことができます。また、休み時間や短学活等においても常時接続をし、先生方との連絡や子どもたち同士のコミュニケーションをとる場合にも活用されています。移動教室の際には学級の生徒たちが自分たちから進んで機器を移動して設置する様子も見られ、本校では当たり前前の姿として定着してき

ています。さらに、学校行事の際には、オンデマンド動画も活用し、場所や時を選ばずに視聴できるように環境を整えています。このことは不登校の生徒のみならず、当日体調不良で休んでしまった生徒にとっても、級友と話題を共有することができるとともに、登校できている生徒たちにとっても、振り返りの機会にもなっています。

一方で、課題としては、教師の発問や生徒の発表などの音声は聞き取れるものの、黒板の板書や大型提示装置などの画面は、タブレット端末の小さい画面では読み取りが困難な場合があり、より配慮が必要となることが挙げられています。

不登校の生徒たちにはコミュニケーションをとることで自分を苦手としている生徒もいます。本校では、オンラインでのカウンセリングも試行しています。ICT機器は決して万能ではないものの、その良さを生かしつつ柔軟に使用できる環境を整えていくことが必要だと感じています。今後も、より良い運用の在り方を検討していきたいと考えております。

教育で大切にしたいこと

「教職員へのメッセージ」

小・中学校長会の会長として、盛岡市の学校教育を牽引していただいたお二人の校長先生からのメッセージです。

Well-being じありたい 「大事にしたい「かきくけこ」と」

盛岡市小学校長会

会長 本田岳雄

(厨川小学校長)



学校の先生の仕事の特殊性は、「肉体労働」「頭脳労働」以上に「感情労働」の比重がとても高いこと、と時々耳にします。その通りだと思います。

誰しも心身の好不調はあるものです。その波(機嫌)をそのまま職場に持ち込むことはできません。ましてや教室に持ち込むなど論外です。子どもたちも一人の人格。思うようにいかないのが当たり前です。できるだけその日の振幅を小さく抑え、いつもと同じようでないければなりません。そうやって学校の先生は、日々身体と頭と心に汗をかいて、子どもたちのために頑張っています。素晴らしい

ことです。

これまで沢山の先生方にお会いしてきました。沢山の教室や子どもたちを見てきました。いつの頃からか、心が温かくなる先生、信頼される先生、勇気づけられる先生、学ばせたい先生、惹きつけられる先生はいくつかの共通項があるのを見えてきました。それらを「かきくけこ」と整理してみました。自分も心がけるようにしています。

何かと周りの目が気になったり、価値基準をより懐深くしたりしなければならぬ現実も分かります。分かり合えない時の苦しさも分かりません。言うほど簡単なことではありません。私自身も職員や子どもたちとちゃんとかみ合っているか、自問自答の毎日です。

ただ、こんな気持ちでいることが Well-being なのではないか。こうありたい。そう願っているだけです。

「か」構えが自然体で柔らかい。非言語(まなざし、表情、しぐさ、物言い等)が豊か。明るい。前向き。楽しそう。話しかけたくなる雰囲気がある。その人なりの華がある。

「き」聴く耳がある。音として「聞く」のではなく、ちゃんと話を「聴いて」くれる。

「く」食いつくポイントが的確。話の趣旨が伝わる。求められていることを把握する。危機管理感覚、察知力がある。

「け」経験を経験則にして次に活かす。成功体験は次も上手くいくかどうかは未知数。だから危険。慎重に。失敗体験はほぼ間違いない。だから気を付ける。

「こ」こだわりをもつ。自分なりの。大げさに言うなら信念、理念、哲学。それがないと本音で学級目標は作れない。理屈抜きで喜べない。叱るべき時に叱れない。ただし、そのこだわりでホントにいいのかわかり返って更新しておかないといつの間にか裸の王様。

「と」年齢は関係ない。

当たり前のことしか・・・

盛岡市中学校長会

会長 三浦裕明

(盛岡西峰学園土淵中学校長)



あとわずかで退職を迎えるが、今の時点でも、教員

人生に感慨を抱いて振り返ることはできていない。来年度以降の学校のことや目の前の子ども達のことを考え、歩みを振り返る余裕などない。しかし、先日『道の迹』という盛岡市の退職校長が書かなければならない文章を書くにあたって、束の間であるが、否が応でも振り返らなければならぬことになった。

振り返りながら思ったことは、いつも、今と同じであったということである。何歳の時も、どの学校・職場にいても、目の前の子ども達のために全力を尽くしていたということである。

なりたくて教師になった。なぜ、なりたかったのか。それは、子どもが好きだったからである。子ども達のために自分の力(自分の力の多くは、後に子ども達によって育ててもらったのだが・・・)を使いたいと思っていただけである。だから、いつも、目の前の子ども達のことを考えていた。頭を使っていた。思考していた。そして、行動していた。実践していた。そして、また、思考し、実践していた。この繰り返して時は過ぎた。一つ一つに反省はたくさんある。しかし、取り組んでい

たことに悔いはない。その時、その時で精一杯考え、一生懸命臨んできたからだと思う。「教職員へのメッセージ」というテーマでの文章依頼であるが、気のきいたメッセージは発せられない。当たり前のことを伝えるしかない。

子ども達への教育的愛情。これを大切にしてほしい。この原動力さえあれば、自ずと、考え、行動する人となる。それを積み上げ、継続してほしい。その姿こそが、まさしく人としての後ろ姿を子ども達へ見せ、子ども達に希望と勇気を与え、あるべき姿、目標を示すことになると思う。そして、それを越えていく人を育てていくことにつながると思う。

子ども達の明るく美しい未来と子ども達の力、そして、私たちの思いの欠片はいつか気づいてもらえ、いつか心に刺さってくれると信じて、目の前の子ども達のために、自分ができる目の前のことをキラキラさせながらチャレンジしていったらいい。そんな毎日の積み重ねで、振り返ると幸せだったと思える教職員人生になることを心から願う。

令和5年度 いじめ防止標語コンクール

入賞作品紹介

子どもたちの「いじめをなくそう」という決意が伝わってくる作品ばかりです。



ともだちに はなそう

あかるいことば しんせつことば
太田東小学校 1年 眞壁 壮次

やさしいクラス やさしい先生 やさしい学級

北松園小学校 2年 佐々木 翼

みんなちがう それぞれのこせいを

ばかにしない

向中野小学校 3年 山下 径 佑

さらうより 良いこといっぱい さがそうね

東松園小学校 4年 新妻 明子

みんなの笑顔が見たいから

いじめをなくそう ぼくらの手で。
月が丘小学校 5年 佐々木 利人

やってみよう！ 周りが笑顔に なれること

桜城小学校 6年 藤原 茜太朗

気づいたら 通りすぎずに 声掛けて

仙北中学校 3年 菅原 朋香

大丈夫？ その声だけで 救われる

飯岡中学校 3年 竹内 海悠



ともだちを よろこぶことばで たいせつに

山王小学校 1年 城 和沙

ありがとう。毎日いっしょにいてくれて

月が丘小学校 2年 柏谷 直希

ともだちの ころろにのこる ありがとう

山岸小学校 3年 太田 莉桜

大じようぶ？ こそこそ話していない？

上田小学校 4年 佐藤 陽奈

遊ぼうよ その一声で 思いやり

山王小学校 5年 下斗米 結奈

やさしさを 人の心を しあわせに

向中野小学校 6年 白木 魁

軽い気持ちで言った重い言葉

見前中学校 1年 平野 紬

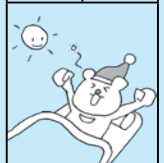
ほんとはね 笑っているのも もう限界

見前中学校 3年 小野 壮太郎

応募いただいた児童生徒、御指導、御協力いただいた先生方に心より感謝いたします。

なお、本コンクールは、今年度をもって、終了いたします。これまでの各学校での取組に改めて感謝を申し上げます。

あとがき



▼1月1日に発生した能登半島地震により亡くなられた方々に、謹んでお悔やみを申し上げますとともに、被災された方々にお見舞い申し上げます。被災地域の方々の安全、そして一日も早い復旧・復興を心からお祈り申し上げます。▼今冬の盛岡は例年より雪が少なく、寒さも厳しくなかったとはいえ、学校への新型コロナウイルスやインフルエンザ感染症の影響は少なからずありました。▼そのような中、第58回研究発表大会が無事に開催できたことに感謝申し上げます。発表して下さった先生方、参会の先生方、大変ありがとうございました。▼本号では、校内教育支援センターやICT活用による「学びの保障」の取組を紹介しました。今後、各校において工夫を凝らした取組を進められると思いますので、ぜひ、教育研究所に事例をお寄せいただきたいと思います。▼2月3日、教育振興運動実践発表大会が行われました。ステージ上の子どもたちから、「夢」「誇り」「志」、そして、溢れんばかりのエネルギーが感じられました。▼来年度も、所報こずかたでは、盛岡の素敵な子どもたちの姿を取り上げていきます。よろしくお願いたします。